

## ベートーヴェン作曲「ピアノ三重奏曲 第7番 変ロ長調 作品97 大公」についての一考察 — ベートーヴェンによる楽曲へのスケルツォの導入 —

村 澤 由利子

(キーワード：大公トリオ，スケルツォ，ベートーヴェン)

### はじめに

ベートーヴェンのピアノ三重奏曲の中で、最高傑作であり、最もよく知られている、第7番 変ロ長調 作品97「大公」を、2007年10月15日に、ヨーロッパ、ポーランドの首都ワルシャワで演奏する機会を得た。共演はワルシャワ・フィルハーモニーのコンサートマスター ピョートル・ツェゲルスキー氏と首席チェロ奏者 カジミール・コズラック氏であった。会場はワルシャワ・フィルハーモニーの室内楽ホールで行われた。

また、2008年11月16日「大塚ヴェガホール」において、“鳴門日独友好協会 創立30周年記念コンサート 村澤由利子&ザルツブルガー・ゾリステン ～心に響くヨーロッパの調べ～”を開催し、ヴァイオリン：ルッツ・レスコヴィッツ氏，チェロ：ウーヴェ・ヒルト＝シュミット氏と、同じく「大公」を共演した。

この演奏会のためにピアノ演奏の研鑽とアンサンブルについての研究を行い、特にベートーヴェンのスケルツォに興味を持ったので考察を加えた。

### ベートーヴェンの室内楽曲について

ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven 1770–1827) は古典クラシック音楽における重要な作曲家であり、第9交響曲「合唱」は日本で最も頻回に演奏される曲として親しまれている。彼の生涯における作曲活動は多岐にわたるが、ピアノ曲と室内楽曲はその中で一貫して重要な部分を占めている。

大変有名でよく演奏される「悲愴」, 「月光」, 「熱情」などの含まれる32曲のピアノソナタ, そして「春」, 「クロイツェル」でよく知られている10曲のヴァイオリンソナタ, さらに5曲のチェロソナタ, そして7曲のピアノ三重奏曲がある。ピアノ三重奏曲は、ピアノ, ヴァイオリン, チェロのための曲であり、そのうちの第7番として、1811年にこの「大公」が作曲された。弦楽四重奏曲は16曲あり、Op. 59-3が「ラズモフスキー」(公爵の名)としてよく知られている。

ベートーヴェンは1792年、21歳の時にボンからウィーンに遊学のために移り、まもなくハイドンに師事しながら、ピアニストとしてウィーンの社会に確固とした地位を得た。貴族達とも親しくなり、ポヘミアの貴族カール・フォン・リヒノフスキー公爵もその一人であった。ベートーヴェンは、公爵の館で開かれる室内楽の演奏会のために、3つのピアノ三重奏曲を献呈している。これが作品番号1の3曲(1792~96年)であり、ウィーンで出版された。以後次々と室内楽曲が出版されている。

この時代のウィーンは、芸術のなかで特に音楽が貴族階級によって支えられていて、伝統的な音楽を好むと同時に、革新的ではあるが、新しい才能による良い音楽を受容するといった優れた環境にあった。これが、多くの芸術家を引き寄せた理由であるとされる。ベートーヴェンもこの街で格別の支持を得て活躍したために、貴族の館で演奏される室内楽曲の重要性が高かった。

ナポレオンとの戦争が終わった後のウィーンで、1808年に、ベートーヴェンの新しい後援者ラズモフスキー公爵が結成した弦楽四重奏団は、ヴァイオリン奏者がリヒノフスキー公爵家で演奏していたイグナツ・シュヴァンツであり、第二ヴァイオリン奏者がラズモフスキー公だった。ピアノ三重奏曲第5番、第6番は1808年に作曲され、第7番「大公」は1811年に作曲されている。

ベートーヴェンは、弦楽四重奏曲を1800年に長く試行錯誤を繰り返した後に、作品18として6曲を世に出した。彼がハイドンやモーツァルトの弦楽四重奏曲に学びつつ、ベートーヴェン独自の道を歩み出したとされるが、弦楽四重奏曲の伝統的なスタイルからは逸脱したものではない。しかしこの作品18の1, 2, 4, 6番にスケルツ

オ楽章が存在するのである。この後、1805年に作曲された3つの弦楽四重奏曲は「ラズモフスキー」の名前で知られていて、作品59の1の第2楽章にスケルツァンドがある。

このように、ベートーヴェンが室内楽曲の世界において創作活動を高める中で、「大公」も作曲されている。この曲は、第2楽章にスケルツォがあり、特にこの楽章に注目して検討を加えた。

ピアノ三重奏曲 第7番 変ロ長調 作品97 「大公」

第1楽章 アレグロ モデラート (Allegro moderato)

第2楽章 スケルツォ：アレグロ (Scherzo: Allegro)

第3楽章 アンダンテ カンタービレ マ ペロ コン モート  
(Andante cantabile, ma pero con moto)

第4楽章 アレグロ モデラート (Allegro moderato)

1811年に作曲されたこの曲は、ベートーヴェンのピアノ三重奏曲の中で最高傑作であり、後のメンデルスゾーン、ブラームス、ドヴォルザークなどの人気作品と比較してもピアノ三重奏曲の王者と言える。ピアノ、ヴァイオリン、チェロは対等に扱われ、演奏者は楽器のヴィルトオーソとしての演奏が要求される。名前のいわれは、ベートーヴェンの重要なパトロンで、作曲の弟子であり友人でもあったオーストリアのルドルフ大公に献呈されたことによる。初演は、1814年ベートーヴェン自身のピアノで行われ、彼が公衆の前でピアノを演奏する最後の機会となった。

第1楽章 ピアノが雄大な主題で始まりヴァイオリンとチェロに受け継がれ、中間部のピアノの華麗な動きが素晴らしく、コーダは力強く終わる。

第2楽章 ややおどけたような主題と半音階の動きが現れ、突然ジャズのように聴こえる動機が始まる。中間部はトリオと見られる。

第3楽章 主題と4つの変奏からなる緩徐楽章。内省的な歌の幻想世界の中で、屈指の美しい音楽が表現される。切れずに次の楽章へ進む。

第4楽章 一転して明るいロンドとなり、奔放な主題が現れ、後のシューベルトの音楽を思わせるハンガリーのラプソディ風の曲想である。最後は華やかなピアノの技巧を見せて大きなコーダで終わる。

第2楽章 スケルツォ

3部形式、変ロ長調3/4拍子

- ① 主題がチェロとヴァイオリンによって16小節にわたり提示され、次に8小節間ピアノがこの主題を繰り返す。ピアノは右手がチェロとヴァイオリンのメロディを奏し、左手はチェロの第5小節目からと同じメロディを奏している。(譜例1)
- ② 第16小節目は、ヴァイオリン、チェロにピアノが加わるが、アウフタクト(弱起)ではじまる8分休符の入り方が難しい。この主題はピアノソロとなり、チェロとヴァイオリンの両方の部分を両手で奏するために、右手の和音の動きと左手の動きを注意して演奏する必要がある。全体を通してこの主題が中心となり変化する。(譜例2)

(譜例1) Scherzo

The image shows a musical score for the Scherzo movement of Beethoven's Piano Trio No. 7. It features two staves: the top staff is for the Violin and the bottom staff is for the Piano. The tempo is marked 'Allegro'. The key signature is two flats (B-flat major/D minor). The time signature is 3/4. The score includes dynamic markings such as 'p' (piano), 'cresc.' (crescendo), and 'sf/p' (sforzando/piano). The piano part shows a complex rhythmic pattern with eighth and sixteenth notes, while the violin part has a more melodic line.

(譜例2)

⑮

⑯

⑰

⑱

⑳

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

㉙

㉚

㉛

㉜

㉝

㉞

㉟

㊱

㊲

㊳

㊴

㊵

㊶

㊷

㊸

㊹

㊺

㊻

㊼

㊽

㊾

㊿

- ③ 第44小節目から8分音符の動きとなり、細かいスラーを伴った動きがピアノとヴァイオリン、チェロとの掛け合いとなり、おもしろい特徴のある動きとなる。(譜例3)

(譜例3)

④⑨

⑤①

⑤②

⑤③

⑤④

⑤⑤

⑤⑥

⑤⑦

⑤⑧

⑤⑨

⑤⑩

⑤⑪

⑤⑫

⑤⑬

⑤⑭

⑤⑮

⑤⑯

⑤⑰

⑤⑱

⑤⑲

⑤⑳

⑤㉑

⑤㉒

⑤㉓

⑤㉔

⑤㉕

⑤㉖

⑤㉗

⑤㉘

⑤㉙

⑤㉚

⑤㉛

⑤㉜

⑤㉝

⑤㉞

⑤㉟

⑤㊱

⑤㊲

⑤㊳

⑤㊴

⑤㊵

⑤㊶

⑤㊷

⑤㊸

⑤㊹

⑤㊺

⑤㊻

⑤㊼

⑤㊽

⑤㊾

⑤㊿

- ④ 第125小節目から変ニ長調のトリオにあたる中間部となり、シンコペーション（節分音）の動きが第160小節目まで続き、チェロ、ピアノ、ヴァイオリンの順に半音階で動く同じメロディを奏する。（譜例4）

(譜例4)

122

136

- ⑤ 第160小節目に突然 ff で力強い、そして軽快な動きのメロディがピアノで始まる。（譜例5）
- ⑥ ここではピアノがトリル（装飾音）を伴った細かい動きとなり、また左手は付点であるため大変演奏が難しく、音楽的に演奏しようとするると困難な箇所である。（譜例6）

(譜例5)

137

(譜例6)

160

- ⑦ 第196小節目よりホ長調に転調して、譜例5と同じ動きが奏される。(譜例7)  
(譜例7)

- ⑧ さらに第257小節目に変ニ長調から変ロ長調に転調して、中間部のトリオの形は終わる。(譜例8)  
(譜例8)

- ⑨ 第286小節目から再びスケルツォが奏され、前半部分に出てきたメロディと全く同じ形がもう一度反復される。(譜例9)

287

musical score for measures 287-290, featuring piano and grand piano parts with dynamics such as *cresc.*, *sfz*, and *p*.

⑩ 第411小節目からコーダ（Coda）に入り、pp から力強い ff の和音で終わる。（譜例10）

411 Coda (譜例10)

musical score for the Coda section (measures 411-433), featuring piano and grand piano parts with dynamics such as *pp*, *cresc.*, *f*, and *dim.*.

422

433

## 第2楽章 スケルツォの特徴

- ・スケルツォのテーマの始まりと、中間部（トリオにあたる）の始まりともにチェロから奏されている。楽曲全体においてもチェロはピアノの後に奏されることが多い。

- ・ヴァイオリンとチェロの両方の旋律が、同時にピアノの部分で奏されている（スケルツォ、中間部とも）。
- ・中間部（トリオにあたる）の第160小節目からはピアノが主役となり、雄大な旋律と右手にトリルを使用したテクニックの難しい動きが上下行し、この部分の動きはヴァイオリン、チェロには表れない。ピアノを中心に置いた室内楽でのベートーヴェン独自の作風が見られる。
- ・この第2楽章を通じて、8分音符が主体となり、16分音符は全く使われていない。
- ・中間部は特に pp から ff の動きが要求され、スビートピアノ（急激に弱く）、スビートフォルテ（急激に強く）など急激な動きを多用するベートーヴェンの特徴が良く表れている。
- ・同じく中間部のシンコペーションの長い旋律の動きは明るいスケルツォの中であって、何か鬱屈した感情が感じられる。ここにベートーヴェンの悩みが少しの間かいま見られる。
- ・この第2楽章スケルツォでは軽快な、とても覚えやすいメロディが奏されるが、中間部（トリオにあたる）がピアノのテクニックにおいても、また音楽的な内容においても演奏する上で難しく、そのため重要な部分であると感じた。
- ・このように、ベートーヴェンがスケルツォを初めて楽曲の中に取り入れたことにより、以後の作曲家が多くスケルツォを取り入れることになった。これまでに筆者が演奏した曲の中で、スケルツォを含んだ例を以下に示す。
  - ベートーヴェン；ピアノとヴァイオリンによるソナタ“スプリング”へ長調 Op.24第3楽章 Scherzo, Allegro molto
  - ブラームス；ピアノ五重奏曲へ短調 Op.34 第3楽章 Scherzo Trio Scherzo da capo al Fin
  - ドヴォルザーク；ピアノ五重奏曲イ長調 Op.81 第3楽章 Scherzo (Furiant) molto vivace
  - シューマン；ピアノ五重奏曲変ホ長調 Op.44 第3楽章 Scherzo molto vivace Trio I Trio II coda
  - フォーレ；ピアノ四重奏曲 No.1 ハ短調 Op.15 第2楽章 Scherzo Allegro vivo
  - シューベルト；ピアノ五重奏曲イ長調 Op.81 (鱒) 第3楽章 Scherzo (Presto)

## 考察

交響曲やピアノソナタでよく知られるベートーヴェンは、弦楽四重奏曲をはじめとして、さまざまな室内楽曲でも重要な役割を果たしている。ピアノ三重奏曲はこの第7番「大公」が最も有名で、よく知られている。オーストリー帝国皇帝の末の皇子にして、ボンの選定候ヨハン・ヨーゼフ・ライナー・ルドルフ大公に献呈されたために、「大公」の名で呼ばれた。当時のハンガリー・オーストリア帝国のフランツ皇帝の弟、ルドルフ大公は、ベートーヴェンの生涯にわたる良き後援者であった。その頃、ウィーンの貴族達の社交の場や家庭において、室内楽は数多く演奏されていた。

ベートーヴェンにとって社会的にも、また、個人的にも厳しい時代であったが、作曲の活動では、中期の充実した時期の最後の期間に相当する。1811年に「大公」が作曲された後、1812年以後1818年までは作品もあまり数多く生まれていない。しかし、このピアノ三重奏曲は、ベートーヴェンの室内楽曲の中では、最高傑作に違いないとされる。彼のスタイルが確立して、更に耳疾に悩みながら、この後の活動後期には、ベートーヴェンの音楽上重要とされる、弦楽四重奏曲やピアノソナタが作曲されている。

ここでスケルツォとメヌエットとの関連について述べることにする。

ベートーヴェンのピアノソナタや弦楽四重奏曲などの室内楽曲、さらに9つの交響曲の構成の中で第1番、4番、第8番はメヌエット楽章であるが、第2番、第3番、第9番ではスケルツォ楽章となっている。第5番、第6番にはメヌエットでもスケルツォでもない中間楽章が置かれている。

当時、メヌエットは優雅な舞曲とされていたが、スケルツォはその語源からも知られるようにコミカルで活発自由な舞曲と見られていた。ハイドンやモーツァルトは、交響曲にメヌエット楽章を置くといった形式を完成させていたが、ベートーヴェンは伝統に従わずに、諧謔性を持たせて、もっと自由に曲を進めるためにもスケルツォを用いたと考えられている。

次にベートーヴェンの作品の中で、スケルツォを含んだ曲を取り出し、列記した（別表1：ピアノパートのある曲目は全楽章を記し、ピアノパートのない曲目はスケルツォの楽章を抜き書きした。）。

このように別表によると、スケルツォの扱いにおいて、ベートーヴェン独自のものが創造されたと見られている。多くの場合、スケルツォは第3楽章に置かれているが、第9交響曲、第12番、第18番、第29番（ハンマークラヴィーア）のピアノソナタと、この第7番「大公」と第8番のピアノトリオの中のスケルツォは、第2楽章に置かれた。弦楽四重奏曲作品18-4、チェロソナタ第3番作品69とバガテル作品33にも、第2楽章にスケルツォが置かれている。これら以外の場合は、第3楽章にスケルツォが置かれている。

ピアノ演奏における技術については、ベートーヴェンがウィーンで演奏家として名を挙げ、ピアニストとして即興演奏に優れていたことが知られている。しかし彼の演奏を模倣する演奏家が多くいたために、彼は苦々しく思っていたことを、残された書簡で知ることができる。これは、楽譜の出版社との交渉の書簡が多く残されている事実からも分かることであるが、彼の出版に対するこだわりのある考えにも影響があったと思われる。また、コードにことさら困難な奏法を要求したり、装飾音符に、モーツァルトのようなスムーズさよりも、一つ一つがそれぞれに難しい演奏を要求している箇所が、「大公」の中でも多く見られる。

ウィーンで、ベートーヴェンは作曲をハイドンに師事した。しかし実際には教わることは少なかった。ハイドンが多忙であったためと、ベートーヴェンの事情によるものであった。そのため、彼は他に作曲の師を求めた。彼は教わるだけにとどまらず、多くの本や教師に学び、さらに研究を続けたことが、ベートーヴェンの手紙やノート、そして遺稿などから次第に明らかになってきている。

また、ベートーヴェンは、エマニエル・バッハや教師達を通じて、ヨハン・セバスチャン・バッハを知り、バッハの対位法やフーガの技法を研究していたことが、近年の研究によって明らかにされ、その影響をベートーヴェンの多くの作品に見ることができる。

ベートーヴェンは旧来の音楽を革新しようとしたのではなく、伝統に従いつつも、スケルツォに見られるように彼独自のスタイルを追求する中で、独創性を打ち出していた。ボンの時代やウィーンの時代においても、ベートーヴェンは演奏家として有名になりつつ、作曲家としてもその地位を築いた。他の作曲家には見られないほど多岐にわたる作曲活動の中で、また伝統の流れの中で、ベートーヴェン独自の自由な曲想を追求したと見られている。

今回の演奏会のために楽曲の研究を行い、ベートーヴェンが室内楽において、メヌエットの代わりにスケルツォ楽章を置いたことは、彼の後に続く多くの作曲家に対して大きな影響を及ぼしていたことが分かった。これは、シューベルト、シューマン、ブラームス、ドヴォルザークからフォーレなどの、かつて筆者の演奏したそれぞれのピアノ四重奏曲・五重奏曲の中に、スケルツォがあることを見ても理解できることである。

これらの作曲家のスケルツォは、いずれもよく似た印象を与える楽章であり、演奏に際して受ける印象がよく似ていたことが感じられた。ベートーヴェンは、その作曲において新しいことを創作してはいるが、基本的には古典音楽の伝統の中心にいた。そのことは、バッハ、ハイドン、モーツァルトに学んだことが、彼の学習帳や遺品の研究で、次第に明らかにされている。そしてこの研究で、その後続く多くの作曲家も、ベートーヴェンの作風を学んでいることが理解できた。

また以前、ドイツ、ボンにあるベートーヴェンハウスを訪問した際に、めったに入ることの出来ない地下奥深くの、金庫のような大きな部屋に特別に入ることができた。そこにはベートーヴェンが使用した耳の器具や、その時代の彼の家にあった絵や使用した机、道具、楽器等、そして、戸棚に多くの自筆楽譜が保存してあり、その中で自筆の第9交響曲の楽譜（オリジナル）を特別に取り出してもらい、直に見ることが出来た。

その部屋は厚いドアで何重にも仕切られ、空調や温度の管理がなされていて、電気も暗くしてあり、人はほとんど通されなく、その部屋に入るのは日本人としてはおそらく筆者が初めてではないかと思われた。

その自筆の楽譜を見た時、実際にその部屋に、ベートーヴェンが今、そこに存在しているように感じ、体が震えたことを鮮明に憶えている。それほど、オリジナルの楽譜を手取ることは貴重な経験であり、音楽を演奏する上で、ベートーヴェンを自分の体で理解することが出来ると感じた。

## 参考文献

- 1) ニューグローブ世界音楽大事典 第16巻 講談社 1994
- 2) 新訂標準音楽辞典（トーワ） 音楽之友社 1991

- 3) 千蔵八郎著 名曲辞典 (ピアノ, オルガン編) 音楽之友社 昭和59年
- 4) ピアノ名曲辞典 ドレミ楽譜出版社 1988
- 5) 囑 啓成 著 名曲辞典 昭和60年
- 6) 最新名曲解説全集 12 室内楽曲Ⅱ 音楽之友社 1980
- 7) リーツラー 著 ベートーヴェン (改訂新版) 音楽之友社
- 8) 鳴り響く思想 現代のベートーヴェン像, 監修 大宮真琴 谷村 晃 前田昭雄 東京書籍 1994
- 9) ベートーヴェン大全集 室内楽 (Ⅱ) 音楽之友社 1995

## 引用楽譜

- 1) Beethoven Trios, Fuer Klavier, Viorine und Violoncello, Band2, Henle Verlag, 1967

別表 1

- Symphony No.2  
3. Scherzo
- Symphony No.3  
3. Scherzo
- Symphony No.9  
2. Scherzo, molto vivace
- String Trio, Op.9, No.1  
3. Scherzo, allegro
- String Trio, Op.9, No.3  
3. Scherzo, allegro molto e vivace
- String Quartet, Op.18, No.1  
3. Scherzo, allegro molto
- String Quartet, Op.18, No.2  
3. Scherzo, allegro
- String Quartet, Op.18, No.4  
2. Scherzo, andante scherzoso
- String Quartet, Op.18, No.6  
3. Scherzo, allegro
- String Quintet, Op.29  
3. Scherzo, allegro
- Piano Sonata No.2, Op.2-2  
1. Allegro vivace  
2. Largo appassionato  
3. Scherzo, allegretto  
4. Rondo, grazioso
- Piano Sonata No.3, Op.2-3  
1. Allegro con brio  
2. Adagio  
3. Scherzo, allegro  
4. Allegro assai
- Piano Sonata No.12, Op.26  
1. Andante con variazioni  
2. Scherzo, allegro molto  
3. Marcia funebre  
4. Allegro
- Piano Sonata No.15 Op.28 “Pastral”  
1. Allegro  
2. Andante  
3. Scherzo, allegro vivace  
4. Rondo, allegro ma non troppo
- Piano Sonata No.18, Op.31-3  
1. Allegro  
2. Scherzo, allegretto vivace  
3. Menuetto, moderato e grazioso  
4. Presto con fuoco
- Piano Sonata No.29, Op.106 “Hammerklavier”  
1. Allegro
2. Scherzo, assai vivace  
3. Adagio sostenuto  
4. Largo-allegro risoluto
- 7 Bagatelles Op.33  
1. Andante, quasi allegretto in E flat major  
2. Scherzo, allegro in C major  
3. Allegretto in F major
- Violin Sonata Op.24 “Spring”  
1. Allegro  
2. Adagio molto espressivo  
3. Scherzo  
4. Rondo, allegro ma non troppo
- Violin Sonata Op.30-2  
1. Allegro con brio  
2. Adagio cantabile  
3. Scherzo  
4. Finale, allegro
- Cello Sonata No.3 Op.69  
1. Allegro ma non tanto  
2. Scherzo, allegro molto  
3. Adagio cantabile-allegro vivace
- Piano Trio Op.1 No.1  
1. Allegro  
2. Adagio cantabile  
3. Scherzo  
4. Finale, presto
- Piano Trio Op.1 No.2  
1. Adagio-allegro vivace  
2. Largo con espressione  
3. Scherzo, allegro  
4. Finale, presto
- Piano Trio Op.97 “Archduke”  
1. Allegro moderato  
2. Scherzo, allegro  
3. Andante cantabile  
4. Allegro moderato
- Piano Trio WoO 39  
1. Allegro moderato  
2. Scherzo, allegro ma non troppo  
3. Rondo, allegretto
- Trio in E flat for piano, violin, cello Op.38  
1. Adagio-allegro con brio  
2. Adagio cantabile  
3. Tempo di Minuetto  
4. Tema con variazioni, andante  
5. Scherzo, allegro molt e vivace  
6. Andante con moto alla Marcia-presto

# **A study of the Beethoven's Piano Trio No. 7 in B Major Op. 97.**

— Introduction of Scherzo into Music by Beethoven —

MURASAWA Yuriko

I played the Piano Trio No.7 in B major Op.97 “Archduke” on October 2007 in Warsaw with members of Warsaw symphony Orchestra and on November 2008 in Tokushima with Salzburger Solisten.

For this concert, I did the study of the piano performance and the research of the ensemble. Especially, I considered it because I had been interested in the scherzo of Beethoven.